D 20

第2報　性的役割別分業に対する意識と住生活
―― 家事労働空間の一考察 ――

共栄短大　樋口真基子　日本女子大　沖田富美子

目的及び方法は第一報に準ずる。但し、今回は婦人の生活価値観が学歴と就労動機並びに性的役割別分業に対する意識の中で決定づけられていると推察する。なぜならば、生活価値観は婦人の年齢からその経験的判断に頼るところが大きいからである。そこで、就労形態の目的を創造性におくか、もしくは経済性におくかの実際における住生活の実態と今後の課題を検討する。結果先ず、職業観と女性の生き方の中で本来、婦人は家庭を守る事が義務であると思いながら、経済的自立の立場ではなく家庭を支える為に就労していると意識している割合が6割ある。又、実務上専門技術職に従事している割合は1割であるが、自分の能力・技術を生かすために働いていると意識している割合は3割方である。ここで、決定的な対称性をこの両者に捉えることには無理があるが、住生活を検討してみると、仕事の内容で住生活に対する要求が違ってくることは住様式の決定要因に考えられるようなものと同様に想像できるが、今回の調査では明確に把握でききらない。つまり住空間の中で定かな空間しての形態ではあらわれてきていない。場と行為と物との断片的な居住者（婦人）との関わりとして、若干、その差異を見ることができる。但し、創造的な仕事に関わっている人の住生活における家事労働の場としては、十分な住要求ではない。あえて、就労婦人の能率面から家事労働と住空間を考える時に考慮しなければならないことを以下の2点に要約する。 1)家事作業の延長が居間で行われ，家事コーナーを設けたい位置に台所と居間の隣をのぞんでいるいこと。2)家事作業の道具とものの整理・処理のために洗面所の充実が図られること。